

A La Meiji-mura

呉服座の観客席

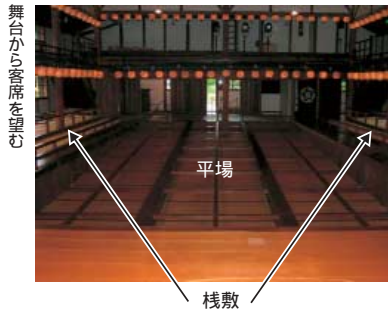
呉服座（4丁目49番地）は明治初年に大阪府池田市に戎座として誕生し、後に呉服座と改称、昭和四十四年まで使われていた芝居小屋です。この小屋の客席は今の劇場とは大きな違いがあります。

まず中央には四角く仕切られた「升席」があります。大人が四人ほど座れる席で、「場」とか「平場」と呼ばれ今日の二等席に相当する席でした。この席は舞台に向かって緩く前傾しており、後ろの人でも無理なく舞台を見ることのできるよう配慮されています。

次に平場の両脇には「棧敷」と呼ばれる席があります。棧敷は古代社会においては「仮床」と呼ばれ神様を呼び寄せる場として作られた高い台で、神に供え物を捧げる場所としての性質も併せ持つ場でした。時代が下ると、お祭りや芸能を鑑賞するための高い位置の席を指すようになりました。芝居という言葉はもと「芝生に座る」という意味から来ていますが、その芝生の周囲に設けられた特別席が棧敷でした。現代の劇場なら中央前方が高級席ですが芝居小屋では舞台を斜めに見る事を強いられるこの席が高級席でした。愛媛県の「内子座」には上手（舞台上に向かって右）の棧敷に「本家席」がありました。また秋田県小坂町にある

「康楽館」の二階棧敷前には火鉢や靴を置くスペースが設けられ、平場にはない上客に対する配慮がうかがえます。

呉服座の建っていた大阪と兵庫の県境の猪名川流域は地芝居が盛んな土地で、地元の人々は普段、神社の野天で演じていましたが、特別な時にはこの呉服座の舞台に立つことができました。また、巡業する古典演劇や大衆芸能も行われ池田周辺や能勢、丹波山地からも観客を集めました。毎年五月から六月にかけて公演される歌舞伎はそら豆の収穫期に当り、そら豆入り弁当を持参し幕間を利用して食べていたそうです。当時芝居は人々の最大の娯楽であり、こうした芝居小屋はまさに「娯楽の殿堂」でありました。



舞台から客席を望む



升席

お洒落で衛生に配慮された明治の病院



写真1

日本赤十字社中央病院棟（4丁目35番地）（写真1）は木造洋式病棟で、赤阪離宮と同じ片山東熊の設計で、室内の衛生を保つためとくに換気に配慮された建物になっています。

部屋の空気を清浄に保つため、病室の天井の四隅には換気口（写真2）が設けられ、屋根にある三基の換気筒へ空気を導いています。土中の湿気を選けるため、レンガ基礎を高めに積み上げて地面から高い位置に床を設け（写真3）、病室内の床面には開閉自在の換気口（写真4）を備えています。

換気は室内の空気を浄化する作用があると考えられ、ナイチンゲール（一八二〇〜一九一〇）もその著書（注）の中で次のように記しています。『窓は、下部でなく上部を開けること。（中略）換気とは、要するに（部屋の）空気を清浄に保つこと、それだけを意味するのである。これを判定する適切な基準としては、朝、寝室あるいは病室から外気の中へ出てみることである。そして再び戻ったときに、少しでもむっと感じるようであれば換気は充分でなかった（後略）。』

換気に次いでナイチンゲールは、『新鮮な空気に次いで病人が求める一番目のものは、陽光をおいてほかにはない』とも記しています。この日本赤十字社中央病院病棟は明治村への移築に際し、敷地の制約のため建物の方位が180度変えられており、現在南に面している全面ガラス張りの廊下は本来北側にありました。暗くなりがちな北面を明るくするため、廊下をガラス張りにし採光に配慮したものです。そのほか廊下の隅を少しカーブさせ、ほこりが溜まらないような工夫（写真5）がなされているところもあります。

外壁はハーフィンパー風のデザインが取り入れられ、軒先には華やかな軒飾りが廻らされています。現在北側になって目立ちませんが鑑戸の上部には草花をモチーフにした透かし（写真6）があり、明治二十二年に建設されたとは思えないほど洒落た印象を受けます。煉瓦造の本館は関東大震災で被害を受けてしまいましたが、移築されている木造の病棟は昭和四十年代まで使用されていました。

（注）看護婦著書（F・ナイチンゲール著、薄井拍子他訳、現代社、二〇〇四）



写真2 天井の換気口

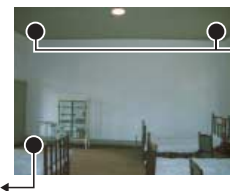


写真4 床の換気口



写真3 床下換気口



写真5



写真6